

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第33号

平成28年10月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 後醍醐天皇の親衛隊長、名和長年

### 帝の隠岐脱出を指揮し、船上山合戦に成功

#### 鯛売りの記録残る、海の幸の財政力

伯耆国長田は、大山の西北に位置し、大山寺から4～5キロの地にある古代、高地集落の跡である。

この長田から東北に海より、海岸線沿いに名和荘があり、古代のタタラ～鉄の産地で、海岸線に位置することから～海の幸、ウニ・アワビ・サザエ・海藻類等が豊富で、これら海の幸を乾燥し、塩漬けにして、各地へ送り出していた。記録に「鯛売り」の文字が残るのは、このことを著しており、豊かな財政力が窺い知れる。

文永11年1274、蒙古襲来を受け、関東から多数の御家人が西国へ下ってくる。この時、名和氏も、大山麓の長田から海岸寄りの名和に移る。そして、長年は、この名和の地で生まれる。

名和家は、弓の家門として知られる。

名和川を挟んで東に長者原台地、西に門前台地が広がり、この間約500mある。長者原台地の堤の上から、名和川付近の的石めがけて弓矢の練習をしたと伝わる。また、水田開発は名和川の水を使って水平を出し、田んぼをつくったといわれている。

約束の松の話は、若い頃の長年の逸話で、「俺を牛に乗せて送ってくれたら屋敷の木は思いのままに」と、長年が童に約束をする。そして後に、その童が屋敷に来て、「約束の松をもらいに来た。」と大樹を所望する。

この時、長年の父は、「約束は必ず守らなければならない」と、この童に大樹を与えたというのである。今でも、この逸話は小学校で教えられるとか。

名和家は、名和仕の年貢米を京の公家や皇室に運び上げ、帝との接触もあったものと思われる。

更に、海岸線の警備に当たりながら、隠岐や日本海諸港に出入りすることで、交易も盛んとなり、経済力を備

えていったものと思われる。

加えて、日本海諸港に出入りすることで、村上水軍との交流も始まり、海上権も掌握していったのではないかと。

#### 「天皇を殺し奉れ」との幕府急使も

後醍醐天皇の隠岐配流に随行したのは、左中將一條頭大夫行房、少将六条千種忠顕等であった。その後醍醐天皇を支えたのは村上水軍と山伏であった。

隠岐に配流された後醍醐天皇をめぐるのは、思惑の錯綜と暗躍が渦巻く。何よりも大塔の宮護良親王による帝救出作戦があり、山伏による密使の往来が絶えず、そこに村上水軍の後ろ盾が加わる。

警護にあたった地方の地頭たちによる番役で往来も絶えず、そんな中、「天皇を殺し奉れ」との幕府の急使が走ったとも言われ、加えて後醍醐天皇みずからの脱出計画が画策されたことは間違いのないところである。

この時、後醍醐天皇と関係者との連絡係にあたったと伝わるのが、今もこの地に続く笠置家である。

この笠置家は、笠置寺の僧の子孫と云われ、後醍醐天皇につき従い隠岐に来て、笠置氏を

名乗ったといわれている。

#### 大山は比叡山の実に30倍の面積

後醍醐天皇隠岐脱出と名和長年について、その関係を見てみよう。

元弘3年1333、2月1日、吉野城が落ち、大塔の宮が吉野から姿を消す。その大塔の宮は、2月13日、船上山で頼源に令旨を渡している。

大塔の宮の下で計画された帝救出作戦は、以下のようなものであった。

先ず村上水軍が後醍醐天皇を隠岐から名和港へ運ぶ。



次に、名和長年が帝を名和港から船上山に移す。その船上山では、大山寺・鰐淵寺の僧兵が、後醍醐天皇の警護に就く。この時、大山寺には、南光院・中門院・西明院の3院があり、中門院の別当は、名和長年の弟、源盛が務めていた。最後、大塔の宮が、帝本人を確認する、というものである。

ここで、船上山を含む大山の地の利を見ておこう。

大山は、東西門間約40キロ、南北門間約30キロと、総面積は1200平方キロに及ぶ壮大な山で、比叡山の、実に25~30倍の面積を有している。

この途方もない広大な山地に逃げ込めば、帝の所在をつかむことは困難であった。

2月23日、隠岐を脱出した後醍醐天皇は、千種忠顕、成田小三郎と同じ船に乗船したことは伝えられているが、その後の足取りは分からない。帝がどこに立て籠もったかもわからない環境が船上山にはあった。

名和長年は、5000石のコメを船上山に運び、持久戦の準備をしたといわれている。迷路の地、船上山合戦成功の原因の一つと云われている。

ここ船上山で、名和長年は後醍醐天皇から左衛門尉に任命され、この時まで長高と名乗っていた長年に対し、

「長くて高い」のは危険と、長年の忠節を賞して、長年にせよと、その名を戴く。

後醍醐天皇は、この時、自らが頼る者のいない境遇にあり、そのことを寄る辺もない船にかけて、長年の忠節をほめ、次の歌を残している。

「忘れぬや よるべきも波の あら磯を  
御舟のうへに とめし心を」 (『新葉和歌集』)

3月3日、長年は伯耆守に任じられ、後醍醐天皇は千種忠顕に申し付けて、長年に帆掛け船の紋を書いて与えている。

3月17日には、後醍醐天皇の軍が京都に向けて出兵するが、大將を務めたのは千種忠顕であった。

そして、いよいよ5月23日、後醍醐天皇は京に向けて出発することになるが、この間84日間の行在所は船上山に置かれ、この地で、建武の中興の基礎を構築したが、この時、名和長年の親衛隊長としての役割が始まっている。船上山の行在所で、いわば総理兼陸軍大將兼大蔵大臣を務めたのが名和長年であった。

5月30日、後醍醐天皇は、兵庫の福巖寺に入り、出迎えた正成を引見する。

### 今日を限りと定めたることなれば

建武の新政が始まると、名和長年は、側近中の側近として常に後醍醐天皇の傍らにあって、親衛隊長の役割に専

念する。

楠木正成同様、恩賞方、記録所の寄人になり雑訴決断所にも名を連ねている。そして、この名和長年は東市(左

京)の長官=東市正ひがしいちのかみに任じられている。後醍醐天皇が中原氏の家職を取り上げてまで、京都の商工業者を自ら掌握する狙いがあったのではないかと、思われる。

東福寺に残る日記には、名和長年は「鬮売り」と記されているが、海の幸で経済力を誇示したが故か。

伯耆、因幡の国司、守護になり、後に、出雲も領土としている。

名和家は、伯耆に始まり、京の都を経て、最後は九州八代の地に移り、この八代は九州南朝、最後の拠点になっている。

建武3年1336、6月30日、名和長年の最期を迎える。

この日、長年は、京の都で、九州・中国の幕府大軍と対峙し、五人張りの強弓をくり、一の矢、二の矢、三の矢が、矢継ぎ早に空を飛んだと伝わり、一度に二人の敵を討ち取ったといわれる。

が、この日、「今日を限りと定めたることなれば…後ろ口の木戸を閉じて、我が勢、一人も落とすべからず…」と、壮絶な討死をする。

この年、1月には結城親光、5月には楠木正成、そして6月には千種忠顕と、三木一草と謳われた他の三人がすでに相次いで討死をしており、いまだ生き永らえている長年を揶揄した貴族らに対し、「今日敗れれば、死のう」とつぶやいたといわれる。

### 孫、名和顕興は筑後川の戦いに記録が

名和長年の長男は名和義高で、従五位下左衛門少尉に任じられ、そして、この義高に肥後の国八代荘が与えられている。

八代の地は、九州、幕府軍の抑えの地として要衝の地であった。

名和長高は、延元3年1338、5月22日、北畠顕家の軍に参加し、堺浦石津の戦いで討ち死にをしている。

長高の子(養子とも)、名和顕興も伯耆の守に任じられ、吉野南朝、後村上天皇の警護にあたった記録が残る。

正平13年1358、山陰と吉野にいた名和一族は、すべて九州八代に移っている。

正平14年1359、筑後川の戦いに、名和顕興、顕長の名前が記録として残っている。そして、征西府は、菊池城落城後、本拠を名和家の八代に移し、南北合一まで戦う。その後更に、名和一族は、戦国大名へと続くのである。(写真:1ページ「画像提供:東京国立博物館」伝名和長年像2ページ「船上山万本桜公園」鳥取県琴浦町公式HPより)

(文責「四條駿楠正行の会」代表 扇谷昭)

